

## ～第2回 公開シンポジウム～

# ひとりの死から学び、多くの子どもを守るには

—「予防できる子どもの死亡」をなくすことは、その背景を知ることから始まる—

わが国の乳児死亡率は世界一低い水準です。しかし1～4歳の死亡率は、先進国内では高い水準が続いています。これは、医学医療の進歩に比して、事故・虐待・心中などの「予防できる子どもの死亡」を減らす対策が遅れていることを示唆しています。少子化が進みひとりの子どもの命が以前に増して大事になっているわが国にとっては、「予防できる子どもの死亡」をなくすことは、重要な課題です。欧米諸国では「子どもの死亡検証制度チャイルド・デス・レビュー」をつくり、ひとりひとりの子どもの死の状況や背景を分析して予防に成果を上げている中、わが国もこの制度が必要になってきています。

本班主催の昨年の公開シンポジウムでは、わが国でも「子どもの死亡検証制度」が必要であることを各領域から論じ合いました。今年度はわが国の諸領域で始まっている死因究明に関する動きを知り、子どもの死亡検証制度の実現について考えていきたいと思えます。

予防できる子どもの死亡をなくすことを願っている医療・保健・福祉・教育・司法関係者の参加を期待しています。

### ～プログラム～

**テーマ 各領域で始まっている‘死因究明制度’から‘子どもの死亡検証制度’を考える**

司会 奥山 真紀子（国立成育医療研究センター ころの診療部 部長）  
山中 龍宏（緑園こどもクリニック 院長）

ご挨拶：五十嵐 隆（東京大学大学院医学系研究科 生殖・発達・加齢医学専攻 小児医学講座 教授  
社団法人 日本小児科学会 会長）

基調報告：日本小児科学会「子どもの死に関するわが国の情報収集システムの確立に向けた提言書」  
同ワーキンググループ 山中 龍宏委員長、溝口 史剛副委員長

1. わが国で始まっている児童虐待死亡検証の現状と課題  
川崎 二三彦（子どもの虹情報研修センター  
社会保障審議会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員）
2. 死因究明制度の現状と課題  
岩瀬 博太郎（千葉大学大学院 警察庁：犯罪死の見逃し防止に資する  
死因究明制度の在り方に関する研究会）
3. 死因究明に資する死亡時画像診断の活用  
相田 典子（神奈川県立こども医療センター 放射線科  
厚生労働省同検討会）
4. 児童生徒に自殺が起きた時の調査の在り方  
坪井 節子（坪井法律事務所  
文部科学省児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議）

日時：平成23年12月23日（金・祝）午後1時～4時半

場所：東京大学医学部 鉄門記念講堂

東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学大学院医学系研究科 教育研究棟 14階

参加費：無料

**※お申し込み方法 別紙登録票をメールにて事務局までお申し込みください。**

主催：平成23年度厚生労働科学研究 我が国におけるチャイルド・デス・レビューに関する研究班 研究代表者 小林美智子

共催：東京大学大学院医学系研究科 生殖・発達・加齢医学専攻 小児医学講座（  
社団法人 日本小児科学会

事務局：地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪府立母子保健総合医療センター 総務・人事グループ 松本智香子  
〒594-1101 大阪府和泉市室堂町 840 MAIL:chikako@mch.pref.osaka.jp